

あげき 阿下喜マップ

万葉の里公園 いなべ市北勢市民会館周辺
 いなべ市北勢市民会館 Tel.0594-72-2200
 日本現存最古の「万葉集」に詠まれた植物を集め、原歌を添えて紹介しています。6月中旬にはあじさいが咲きほこります。



八幡祭 阿下喜地内
 いなべ市観光協会 Tel.0594-46-6309
 いなべ市無形民俗文化財で毎年7月下旬に行われる大西神社の伝統なお祭りです。みこしが町の目抜き通りを練り歩きます。



市神さん
 古来より、阿下喜は人の集まる所、農産物の集散地であり、定期市が開かれた。初めは月三回であったものが、商品流通の発展とともに五日おきの月六回、いわゆる六斎日市になった。(北勢町史より) その市の発展を願って建てられたようです。

目の地蔵
 自噴の井戸水で目を洗うと目の病気が治るといわれます。



桐林館
 桐林館は、昭和12(1937)年に建築された旧阿下喜小学校校舎(木造平屋建)を活かし、その中に自然、生活用具など市民的財産を保存し、市民の郷土に関する認識を深める施設です。
 ※要予約: いなべ市北勢市民会館
 Tel.0594-72-2200



阿下喜温泉あじさいの里
 Tel.0594-82-1126
 かけ流しのアルカリ性の温泉。PH9.0のお湯は、温まりやすく湯ざめにくく、肌を保護します。

あげきのおひなさん 阿下喜地内
 2月下旬から3月上旬、阿下喜の趣のある町並みが華やかなお雛様で彩られます。



お地藏さん ● 阿下喜各所に祀られています。
 お地藏さんを訪ねてみませんか?
 ※阿下喜駅起点のお地藏さんを巡るコースの一例です。(---線: 約4.3km)
 交通に十分気をつけてください。

間歩 (マンボ)
 江戸時代、水不足に悩む農民が湧き水に目をつけ、小さい崖下から湧いていったのが地下水路の間歩(マンボ)です。阿下喜には複数あるようです。

高瀬舟の船着場 一本松燈籠
 文久元年(1861)に建立され、桑名へ通じる濃州街道を往來する人の目印として、また、産物や年貢米を運ぶ員弁川の高瀬舟の船着場で目印として利用されたといわれています。



※ナローゲージ
 「ナローゲージ」とは、線路幅(ゲージ)が国際標準軌1,435mmよりも狭い(ナロー)鉄道です。国内の鉄道では、JRが採用している1,067mmのゲージよりも狭い線路幅の鉄道を指すことが多いようです。昔は、国内各地で運行されていましたが昭和40年代までにそのほとんどが廃止され、現役で残っている762mmゲージは、北勢線、内部、八王子線と黒部峡谷鉄道(愛称: トロッコ電車)の3路線だけです。

員弁川遊歩道
 (全長2.2km)
 員弁川右岸堤防に沿って員弁川橋から天王橋までの遊歩道です。



森の広場博物館 館長 佐藤 誠治 Tel 0594-72-5214	北勢の山で採れる杉や雑木で作った木工製品を展示。切り株を無駄なく使ったテーブルやイスは自然な造形が特徴です。■要予約 体験可
手作り工芸博物館 館長 近藤 佳代子 Tel 0594-72-2063	ケヤキやヒノキの廃材を利用して制作した法隆寺や石取祭車、神輿などを展示。写真から設計図を起こした作品は精巧華麗そのものです。■日曜日休館・要予約
夢屋 館長 谷口 亮三 Tel 0594-72-2019	古き良き時代のビートルズやエルビスプレスリーなどに關わる逸品を展示しています。■日曜日休館・要予約
フチ鉄道博物館 館長 安藤 たみよ Tel 0594-72-2478	北勢線の廃線問題を機会に、存廃問題の新聞切り抜きや資料、鉄道模型や切符・写真などを展示しています。■要予約
銅板工芸の館 館長 土井 澄孝 Tel 0594-72-3791	動物、景色、文字などの銅板工芸作品を展示。できあがった作品の温かみは心を落ち着かせてくれます。■要予約 体験可 10:00~15:00
昔の器と剥きもの館 館長 宮本 浩義 Tel 0594-72-2141	剥(む)きもの自丁を使った縁起物を、大正から昭和初期にかけての器や漆器などと展示しています。■水曜日休館・要予約 8:30~18:30
手作り絞り博物館 館長 太田 のぶ代 Tel 0594-72-7770	色鮮やかで洗濯しても色落ちせず、扱いやすい「有松絞り」手作りの作品などの展示をしています。■水曜日休館・要予約 10:00~15:00 体験可
仙松かじや 館長 横田 専之助 Tel 0594-72-2561	明治25年から続く鍛冶屋では炭で火を焚き、焼けた刃を叩き形成していくという昔ながらの諸工程を公開しています。■日曜日休館・要予約
遊木館 館長 木村 修 Tel 0594-72-2846	季節感ある日本の美を繊細に表現した木工作品の展示及び小さな作品づくりの体験実習ができます。■要予約 体験可

阿下喜の由来
 阿下喜は「上木」ともいわれるが、「阿下喜根元記」によれば、この辺りには檜の大木が生い茂っていたので、それを御用木に上たからとも「上木」が出たからともいわれる。また、鶯の名鳥を局より内裏へ差し上げたところ喜ばれ、年貢を三分の一に減らされたので「阿く下に喜んだから阿下喜」といったもよう。とある。しかし日本に漢字が入ってきた頃より昔、縄文弥生時代にすでに阿下喜に人が住んでいたのだから、その頃の人々が、くぼ(低いところ)に対しての低い所をいう「あげ」と高いところを築くことから、小高い所という意のある「き」から「あげき」とよんでいたのではなからうか。
 目で見える学区の歴史 阿下喜・飯倉・瀬木・小山(阿下喜小学校PTA)より

鉄道が阿下喜へ来る
 狭い軌道の上を小さな客車をひっぱって走る小さな蒸気機関車は「北勢鉄道線路沿線名勝案内記」で「従来員弁郡の地は交通不便の為め県下の北海道と目されたりき、然れど本鉄道の開通に依りて郡の中央を串通するを得ば交通運輸の利を得るのみならず、四時風光を採るの人士の便亦夥からずと云うべし」といっているように員弁の人々の目を外へおけた。人々は軽便といひ、大正から昭和にかけて阿下喜の人々の乗客への唯一の足として親しまれた。
 目で見える学区の歴史 阿下喜・飯倉・瀬木・小山(阿下喜小学校PTA)より